

編 集 後 記

○鳴物入りの総選挙も終つたが、ふたをあけて見ると若干の左派の進出を見たのみで、大勢はやはり自由党にある事になつた。しかし選挙民も段階と、批判的になつて来ているのは争えない事実であつて、殊に6年前無批判に組織からおかれた参議員選挙も結局は人にある事がわかつて来た様だ。ここで看護婦代表も次の新人が現われる事が必要であらう。

○薬系からは衆望を負つて、高野一夫氏が出て来たが氏は有名な医薬分業論の闘士であるのでいづれその方の活動が始まるであらうが、元来が医薬分業の方が合理的である事はあるが単に医師の調剤権禁止と云う独善的な案でなく、日本の実情に即した大衆のついて行ける様な分業論であつてほしい。

○これに対して医系の方はどうかと云うと頭数は衆議員7、参議員4と云う様に選挙前と変りはない様だが、勝俣、大石、藤森、日高と云う様なベテランの名前が消えたのは残念である。新顔には医師会副会長の榊原氏が出て来たが精力的な氏の活動に期待する所が大きい。

○医界の代表は同時に病院運動の理解者ではあるがこの代表の顔振を見ると、近代病院に関係をもっている様には見えぬ。元来、現在の公的病院の形ではその関係者は金と暇とに縁がない様に出来ているので無理もないが、病院としての代表がない事には何かにつけて不便であらう。

○病院代表を出すには何を云つても、病院の組織を持つ事が必要である。病院は決して医師だけで出来ているのではないので、全従業員をあげれば3,000の病院、30万の票数を集めるのは容易であらう。それには先ず第一に病院協会を強化する事が先決問題である。常に入院料値上運動を中心に、同協会の改組が論議されている様だが本号

発行の6月上旬には病院協会総会、病院学会、開催の機会に何等かの形をとるものと思われる。

○米国の雑誌を見ると、毎年はなばなしいHospital dayの催物の記事が出ているが、病院は社会と共にあると云う考え方は大いに真似しなければならぬ点ではあるまいか。

○厚生省医務局長曾田氏、先日巴里のW.H.Oの大会出席の為空路渡仏された。大会後、1週間してロンドンで世界病院協会の総会があるので次に出席してもらえば、今後の行き方についても大いに参考になる所であらうが、弱体病院協会では何等援助出来ぬと云う実情である。そればかりでなく、協会入会金200万円が払えないから見送りとは淋しすぎるのではあるまいか。本号の巻頭には島内氏の開講の辞がのつているが、おそらくは我国病院管理史に特筆されるべき時期を画するであらうと考えられる。氏からの最近のお手紙によると「教室は今から部屋の境界等をつけ設備、器具等を注文致します。恰度2階が公衆衛生の瀬木先生にてわからぬ事をおきしようと思つています。一応各教室を挨拶にまわりました。今日篠田院長の室を借りて仕事をして居ります。一条君と云う優秀な経済学部出身の方を講師に得て大変便利です。早速4年学生へ週1時間半を5月頃から受持つ事にしました……」

○研修所の島内君の後任には未だ正式に発令にはなりません、厚生省病院課の小西宏技官を得ました。氏は、本誌編集同人であり、最近英国からの便りで読者諸君ともおなじみの事と思います。今後の活躍を期待します。(1953—5—9 守屋記)

表紙説明

写真は病院船松風丸。昭和27年10月28日竣工で、費用は600万円、南国造船製造によるもので所属は大島青松園。全長12m半、速力は19ノットph.である。